

第3回 知識共有コミュニティワークショップ報告

A Report of the third "Knowledge-share" community workshop

折田 明子 (おりた あきこ・Akiko ORITA)

慶應義塾大学政策・メディア研究科 特別研究講師

1. 経緯と目的

本ワークショップは、国立情報学研究所にて公開されている「Yahoo!知恵袋」のデータを活用している研究を発掘し、新たな協働を促進することを目的として、2008年にヤフー株式会社および情報社会学会との共催にて開催を開始した。ヤフー株式会社が提供する「Yahoo!知恵袋」およびその研究用データに関しては、既に社会心理学、言語学、人工知能等多岐にわたる研究成果が発表されていた。こうした多分野における研究者同士の交流をはかることも、本ワークショップの大きな目的である。2009年に開催した第2回ワークショップでは、「Yahoo!知恵袋」のデータを活用した研究に加え、比較研究や社会心理学的分析など、知識共有コミュニティという概念全般に関わるユニークな研究を対象とした。

今回のワークショップは、第3回目の開催として、2010年12月18日に龍谷大学深草キャンパスで実施した。今回は、三つの点において新たな試みを行った。一つには、情報社会学会の活動において、初の関西圏での開催を行ったことである。龍谷大学深草キャンパスにて会場をご提供いただき、教職員の方々のご協力をいただき開催した。二つめには、同日に東京・品川で開催された楽天研究開発シンポジウムと、インターネット中継による共同セッションを実施したことである。ネット企業によるオープンデータの可能性という共通テーマを掲げ、パネルディスカッションを共同で企画して執り行った。三つ目には、国立国会図書館長・長尾真氏の基調講演を含め、ワークショップの内容すべてにおいて、ustreamによるインターネット中継を行ったことである。中継に関しては、龍谷大学渡辺研究室の皆様のご尽力をいただいた。

2. 論文

2.1 論文募集

研究論文を以下の二種類のテーマにおいて募集した。が、これにとどまることなく広く研究/事例/デモ等の成果を募集すると追記した。募集期間は2010年10月25日までとした。

区分(A) :知識共有コミュニティそのものに関する研究

Yahoo!知恵袋のデータ等を題材とし、知識共有コミュニティそのものに関する研究

例:

知識共有コミュニティに対する社会心理学的分析、知識共有コミュニティにおけるプライバシー研究
ネットを介した知識共有サービスの比較研究、ネットサービスによる知識共有発生メカニズムの解明
新たな知識共有コミュニティサービスの提案 等

区分(B) :知識共有コミュニティに関するデータ解析手法や技術に関する研究

Yahoo!知恵袋のデータ等を素材とした、データ解析手法や技術に関する研究

例:

データを素材にした日本語コーパス分析、データを素材にしたテキストマイニング手法
データを素材にした情報検索手法、データを素材にした社会的ネットワーク解析手法 等

これらに加え、本年はオープンデータの利用可能性に関し、ポジション・ペーパーの募集を行った。萌芽的な研究、および新しい視点によるプロポーザルを集めることが目的であり、2ページまでの自由フォーマットにて募集した。

2.2 論文審査および賞

研究論文として、区分(A)に2本、区分(B)に4本、合計7本の投稿がよせられた。プログラム委員によるブラインド査読の結果、区分(A)において2本、区分(B)において3本、合計5本の論文を採録とした。査読プロセスにおいて優秀論文1本およびジャーナル推薦論文1本を選定した。ポジション・ペーパーには5本の投稿がよせられ、いずれも発表可能とした。

3. プログラム構成

当日のプログラムは、(1) 基調講演 (2) 研究発表 (論文・ポジションペーパー) および(3) 共催パネルセッションによって構成した。なお、本ワークショップの様子は、動画配信サービス **ustream** による中継、および共同セッションにおいては楽天シンポジウムとの間で、**Skype** を用いた二地点中継を行った。

冒頭には、公文俊平会長より、ビデオメッセージを通じて知識共有と通識、オープンデータという動きに対する期待が寄せられた。

3.1 招待講演

「大規模デジタル情報の知識構造化と検索」

国立国会図書館長 長尾真氏

本講演では、知識インフラの重要性が強調された。分野を横断した知識を共有し、さらに拡大再生産のための創造・流通・活用のサイクル構築の必要性について、事例を交えてお話をいただいた。ここでいう知識とは、関連するものを有機的に統合し、ネットワークとして統合化したものをさす。データのアーカイブの形式からはじまり、大規模なデータを徹底的に公開し、誰もが利用できる環境を作る”data-driven science”が誕生したと述べられた。特に、確固たる法則のない人文・社会分野では、大規模データが持つ意味は大きい。一方で、そうした情報をどのように検索し、利用するのか。利用を考えたアーカイビングの手法についてもふれられた。たとえば、本を探すときに、予備知識を持たない利用者はどのように検索するのか。Web サイト検索における不定形な情報検索はどのようにあるべきかという問いかけが続いた。自然言語処理の経緯を紹介された後に、国立国会図書館における電子図書館の構築の事例が紹介された。ここでは、電子書籍には目次や索引によって中身を構造化できるメリットが存在するということが事例として上げられた。

講演の最後は、知の共有、知識インフラ、ネットワークの構築について述べられた上で、「知識はわれらを豊かにする」としめくくられた。

なお、本講演の資料は、Slideshare というサイトに公開されている。

http://www.slideshare.net/arg_editor/ksws3rd-nagao-keynote20101218



図1 基調講演 於 龍谷大学顕真館

3.2 研究発表

研究発表は、論文によるセッションを2つ、ポジション・ペーパーによるものを1つ行った。

研究発表セッションの概要は下記の通りである。いずれの発表においても、さまざまな分野の見方によるコメントが寄せられた。

- (1) 研究発表セッション 1 座長:岡本真(アカデミック・リソース・ガイド)
「QA2 部グラフにおけるモチーフを用いたコミュニティの経時的変化に関する分析」
島田 諭 (筑波大学)・小出 明弘・斉藤 和巳 (静岡県立大学)・佐藤 哲司 (筑波大学)
「オンラインコミュニティにおける効用相反とそのハーネシングに関する エージェントシミュレーション」
小林 知巳・高橋 聡・國上真章・吉川厚・寺野 隆雄 (東工大)
- (2) 研究発表セッション 2 座長:江口浩二(神戸大学)
「Q&A サイトにおける自分の投稿に対する評価を操作するために複数のアカウントを利用するユーザの検出」
石川尚季・梅本顕嗣・西村 涼・渡辺靖彦・岡田至弘(龍谷大学)
「SNSにおける活性化状態の可視化」
鳥海不二夫(名古屋大)・山本仁志(立正大)・諏訪博彦(電気通信大)・岡田勇(創価大)・和泉潔(東京大)・橋本康弘(東京大)・石井健一郎(名古屋大)
- (3) ポジション・ペーパーセッション 座長:田代光輝(ニフティ)
「Linked Open Data とコミュニティが拓くオープンガバメント」
深見嘉明(慶應義塾大学)・小林巖生(Open Community Data Initiative)・嘉村哲郎(総合研究大学院大学/東京藝術大学)・加藤文彦・大向一輝・武田英明(国立情報学研究所)・高橋徹 (ATR メディア情報科学研究所)・上田洋 (株式会社 ATR-Promotions)
「LODAC: Linked Open Data によるミュージアム情報の結合」
嘉村哲郎(総合研究大学院大学/東京藝術大学)・加藤文彦・大向一輝・武田英明(国立情報学研究所)・高橋徹 (ATR メディア情報科学研究所)・上田洋 (株式会社 ATR-Promotions)
「知識社会に適したテレコム企業を目指して」
仙石通泰(株式会社 三技協)
「ATND から見るプログラミング言語の民族性」
山崎由佳(慶應義塾大学)
「スマートメーターに代表とされる POU データのオープンデータとしての共有」
梅嶋真樹(慶應義塾大学)

3.3 楽天技術開発シンポジウムとの共催パネルセッション

東京・品川で同日に開催となった第3回楽天技術開発シンポジウムとは、Skype 中継による共催パネルセッションを下記の要領で行った。いずれの会場にも遠隔の様子をスクリーンに映し、交互に質問・発言しながらパネルディスカッションを実施した。本ディスカッションでは、データを提供する側(企業)、データを研究利用する側(大学)それぞれのメリットを明らかにしつつ、そもそものデータの提供者(利用者)を含めて、誰もがこれを活用していくためにはどのような仕組みが求められているのか、という議論がなされた。

「Open Data が切り開く新時代の研究・開発 ～新たな産学連携の形を求めて～」

【知識共有コミュニティワークショップ パネリスト】

長尾 真氏 (国立国会図書館長)
岡本 真氏 (アカデミック・リソース・ガイド株式会社)
片山 玲文氏(ヤフー株式会社)
渡辺 靖彦氏(龍谷大学)
モデレーター: 折田明子(慶應義塾大学)

【楽天研究開発シンポジウム パネリスト】

喜連川 優氏 (東京大学 生産技術研究所 教授)
國領 二郎氏 (慶應義塾大学 総合政策学部長 教授)
松井 くにお氏 (ニフティ株式会社 技術理事)
小町 守氏 (奈良先端科学技術大学院大学 助教)
モデレーター: 関根 聡氏(楽天技術研究所 NY)



図 2 パネルディスカッション（龍谷大学会場）

3.4 表彰

プログラム委員による選考の結果、次の論文がワークショップ優秀賞として表彰された。

「Q&A サイトにおける自分の投稿に対する評価を操作するために複数のアカウントを利用するユーザの検出」

石川尚季・梅本顕嗣・西村 涼・渡辺靖彦・岡田至弘(龍谷大学)

4. おわりに

第3回となる本ワークショップにおいては、従来の知識共有「サイト」というテーマに留まらず、あらゆるオープンデータについて、産学協同の可能性を考える機会となった。また、同日開催となった楽天研究開発シンポジウムとは、むしろ同日開催かつ関東・関西という場所の違いを好機ととらえ、新たな試みとして多くの参加者を巻き込んで今後の可能性を議論することができた。次回以降、情報社会学会が産学との関わりの中でどのようにオープンデータの活用、知識インフラの構築に貢献していけるのか、ワークショップの企画を含めて検討したいと考えている。

なお、中継にあたっては、龍谷大学渡辺靖彦准教授および研究室の皆様が、連日に渡って楽天技術開発研究所とのテスト通信を以て万全を期して下さった。このほか、初の関西開催に当たって、龍谷大学には多くのご貢献をいただいた。文末となったが、ここにお礼を申し上げたい。